十月心光寺定例聞法会のご案内

＊期　日　平成十五年十月十六日（木曜日）《＊毎月十六日》
＊時　間　十六日（昼席）午後一時三十分より　（夜席）午後七時より
＊会　場　（昼席）心光寺本堂　（夜席）心光寺庫裏
＊講　師　大石　法夫　先生（広島市在住）

心光寺からの便り

スススキの穂が風に揺れ、空は高く澄んで、秋は次第に深まっていきます。

◇先月はお彼岸の法座でした。大石先生は八月に続いてお彼岸の法座でも、業についてのお話をしてくださいました。その中で深く心に残っているのは、大石先生のお母さんについてのお話でした。それはこういうお話です。

「業を背負うて生きていく。目の前で母がそれを見せてくれましたよ。九十何歳の母が中学生の孫に向かって合掌して、

『真雄（まさお）ちゃん、長い間お世話になりました。このご恩は死んでもよう返しません。こらえてください』

言うて、畳に手をついて額を畳につける。驚いてね。母が世話するから孫が慕うてくるのでしょう。その世話をしとる孫に向かって、『長い間お世話になりました。このご恩はよう返

しません。死ぬまで。こらえてください』と。私はどういう心境からあれが出るんだろうかと思うてね。このことを私は何度も話します」

これはどう考えても理不尽というか、我々の理解を超えています。合理的な思考が身についた現代人の常識からすれば、とうてい理解できない話です。しかしこれは作り話でも何でもなく、事実そういう人がおられたのです。

このお話は先生のご著書にも、次のように書かれています。

「以前から私達が参りましても、最初の挨拶から合掌して頭を畳につけて申します。

『いつもお世話になります。このご恩は死んでもよう返しません。こらえてください』

私も合掌して挨拶しますが、こんな話をききますと私の方が、ほろっとして、ものが言えなくなります。私だけにではないのです。孫に対しても頭を畳につけて言う姿勢を見ると、これが母の生活の根本ということが分かります」

（『生まれてよかったですか』一〇八頁）

これを読むと先生のお母さんのその態度は、お母さんにとって少しも無理なことではなく、わざとらしいことでもなく、普段から誰に対しても、ごく自然にその態度で接しておられたということがよく分かります。

私は九月のお彼岸が終わった後、この先生のお母さんのお姿がずっと心に残っていました。今もそうです。ことに私は色々な問題をきっかけにして、様々な「思い」が雲のように湧き起こって困惑することがしばしばあります。こういうのを疑蓋（ぎがい）というのだと思います。放っておけばその「思い」はどこまでも際限なく続いて止むときがありません。しかしその渦中において、大石先生のお母さんのこのお姿を思い起こし念ずる時、不思議にもその「思い」から解放される経験が幾度となくありました。今もそうです。

なぜなのでしょうか。自分でもよく分かりません。でもとても大切で根本的

なことがそこにはあるように感じています。そこで今月はそのことについて尋ねてみたいと思います。

◇お世話をしたお母さんがお世話をされたお孫さんに手をつかれ、畳に額をつけて、「ご苦労をおかけします。このご恩はようお返しできません。こらえてください」と言われる。これは一体どういう心から出ているのか。それは誰しも考えるところです。私もそれを思いました。しかし同時に、このお姿は説明してはいけない、理解してはいけないと、直感的に思いました。

常識からすれば、全く理不尽としか言いようがありません。しかし理不尽なそのお姿のままで、そのままいただかせてもらうことが大切だと感じました。そこに不思議にも、理屈を超えた力を賜るのです。

なぜでしょうか。それはそのお母さんのお姿に、南無阿弥陀仏の具体的なお姿を感じるからです。いわば南無阿弥陀仏の生身のお姿です。南無阿弥陀仏は単なる呪文や言葉ではありません。また天から聞こえる神秘的な声でもありません。南無阿弥陀仏に救われた人を通して、その姿を具体的にその人の上に現すのです。南無阿弥陀仏に本当に救われた人は、自らが救われたが故に、その言動の上に、自らを救った南無阿弥陀仏の法を自(おの)ずから現すのです。それは肉体を持った生身の南無阿弥陀仏のお姿と言ってもいいでしょう。そのお姿に触れさせてもらうことが、最も大切で根本的なことだと思っています。その時そのお姿が私に迫ってきて、「思い」や理屈に振り回されて流転する私をひっくり返してくださるのです。

蓮如上人の『御文』に、

「信心獲得(ぎゃくとく)するというは、第十八の願をこころうるなり。この願をこころうるというは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり」

というお言葉があります。この「南無阿弥陀仏のすがたをこころうる」とは、南無阿弥陀仏に救われた人の具体的な生き様に触れさせていただくことだとい

ただいています。信心を得るというのは、自分の心に何かを握るのではない。南無阿弥陀仏に救われた人の具体的な生き様に触れさせていただくことだったのです。

この「南無阿弥陀仏のすがた」を物語で表わしたものが法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）の物語です。法蔵菩薩は一切衆生の、つまりはこの私の宿業をとことん担い続けよう。そのためにどんなに苦労しようとも決して悔いることはないと約束してくださいました。その願が成就して南無阿弥陀仏という仏様になられたと『大無量寿経（だいむりょうじゅきょう）』には説かれています。

よく大石先生は、法蔵菩薩のご苦労を思えば、私の苦労なんかたいしたことではない。どんなに苦労したといっても、私の苦労は生まれてからの苦労。法蔵菩薩のご苦労は、無始巳来のご苦労だとおっしゃいます。法蔵菩薩のご苦労を思う時、何で私はこんなに苦労をしなければならないのだろうかというような愚痴の思いなど吹き飛ぶということだろうと思います。そして「法蔵菩薩のご苦労を思う時、私は不思議な力がわき出るのです」（『許されて生きる』二一九頁）とおっしるのです。

この法蔵菩薩は単なる物語ではなく、その魂に生きる無数の念仏者達を生み出してきました。むしろそれら念仏者達の魂が、法蔵菩薩の物語を生み出したと言った方がいいかも知れません。それらの方々が生身の南無阿弥陀仏の姿を現してくださっています。我々は南無阿弥陀仏が実際に生きて働く法であることを、それらの方々の具体的な生き様を通して知ることができます。私が大石先生のお母さんのお姿を念じる時、抜け出ることのできなかった分別的な「思い」の呪縛（じゅばく）から解放されるのは、そのお姿の上に南無阿弥陀仏の魂が現われて

いるからだと思っています。その魂によって、私の思い上った心を知らせていただくからです。大石先生のお母さんのお姿を通して、お母さんの上に現われた南無阿弥陀仏の具体的な働きに触れさせていただくからです。そのようにいただいています。

◇大石先生は一冊目のご著書『生まれてよかったですか』の中で、花山信勝先生の『平和の発見』※という書物の中から、福原勲大尉のことについて書かれた部分を引用しておられます。

『『福原勲元大尉は、中国の最前線で、いくつかのトーチカを占領しつづけたあげく、とうとう機銃弾のために人事不省となり、内地へ送られて病院生活を送り、なおってから二代目の大牟田俘虜収要所の所長となった青年である。

判決ののち、彼は故郷に残した父母や、妻子姉妹たちに大きな迷惑をかける結果になった、といっていた。

ある日独房内で自殺をしようとしたことがある。それが発見されて未遂におわってから、見違えるような、立派な人物になってくれた』

刑場に赴(おもむ)く前の心境、生活を次に書き写します。

『八月九日午前四時半、執行を前に、もう一度房を訪ねた。部屋のまん中にフトンをきちんとたたみ、鉄網の戸を開けて私が入ると、両手を畳につき、頭を下げて、

〝先生、ふたたび、このきたない部屋へ、ようこそ、ありがとうございます〟　といった。

※ 大石先生はご著書の中で『平和の発見』について、次のように紹介しておられます。
「日本の敗戦後、多くの人が戦犯者として刑を受けました。戦死した人だけではない。戦犯者として、刑場に消えていった人も多いのです。東京の巣鴨の刑務所で、日本人として唯一人、教誨師として戦犯者に接触された方があります。花山信勝先生です。先生が戦犯者の方々が所内でどういう生活をされたか、どういう心境で人生の最後を生きられたか、国民の前に之をお伝えせねばならぬ。それができるのは自分しかない、自分にはその義務がある、と書き残して下さったのが『平和の発見』という書物です。」(『生まれてよかったですか』二六三～二六四頁)

〝どうですか。ねむれましたか〟

このたずねに対して間髪をいれず、彼は、

〝ハイ、人生最後の旅路の準備のために、十分休ませていただきました〟

と答えた』

『刑場へ向かう途中、スコット中尉に感謝し、

〝大地をふませていただいて、ありがとうございます〟

と彼はいった。その一語によって、地上に生活しながら、かつて一度として、大地の恩を感じたことのない私たち自身、深く反省させられたことであった』（『生まれてよかったですか』二六四～二六五頁）

この福原大尉の最期のお言葉に、花山先生も、そしてこの部分をご著書に引用された大石先生も、深く感動されたのです。「大地を踏ませていただいて有難うございます」このようなお言葉を身をもって生きられた方のお姿に接する時、大地のご恩など考えたこともなく、生きるのは当然の権利だと思っている私の高上がった姿を始めて知らせていただきます。

親鸞聖人は『教行信証（きょうぎょうしんしょう）』の中に「芥子（けし）の地も捨身（しゃしん）の処（ところ）にあらざることなし」（元照律師（がんじょうりつし）『弥陀経義』）というお言葉を引用しておられます。大地のどんな小さな場所も、法蔵菩薩が身を捨てて支えておられない処はないというお言葉です。そのことに深く頭が下がった時、「大地をふませていただいて、ありがとうございます」のお言葉となるのだと思います。

福原大尉のこのお言葉や「芥子の地も捨身の処にあらざることなし」という経典のお言葉と、畳に額をつけて「このご恩はよう返しません。こらえてください」と言われた大石先生のお母さんのお姿とが、私の中で重なってきます。大石先生のお母さんもまた、法蔵菩薩のご苦労に深く頭が下がった方に違いないと思います。畳に額をつけられるお母さんの心の中には、身を捨てて我を支えてくださる法蔵菩薩のお姿が、常に念じられていたに違いありません。それが黙って業を引き受けていかれたお母さんの一番根底にあったものではないかと思っています。

◇大石先生のお母さんのお姿を念じる時、思い起こすお話がもうひとつあります。平成元年一月十七日、大石先生が書信第五信の中に書いてくださったお話です。この書信は大石先生のご著書には収録されていません。長仁寺の江本忍さんが大石先生の書信のコピーを第一信から全て持っておられて、末松和子さん(福岡県新吉冨村)がその内の一部をコピーして私に渡してくださったのです。そのお陰で私もこのお話を知ることができました。そのお話の部分を抜粋させていただきます。

「これは妻から間接に聞いたのです。外から家に帰って玄関に一歩上った途端に妻が話し始めたのです。

『今ね、丁度森繁久弥が話しておったところよ。感動した』と。

テレビに何人かの有識者が出て、昭和の反省、思い出を語っていたのでしょう。彼は二十歳台にＮＨＫのアナウンサーの仕事で満州へ行っていました。仕事の関係で到らぬところはない位、隅から隅までとび廻っていました。

或時、大連で一見して日本人と分かる和服を着た老人を見ました。尋ねてみると長野県出身の農家の人。孫が満州開拓団に入っているのです。再三来いという手紙がくるので会いたくてやってきました。ところが田舎の出身、言葉が分からぬ。どこをどう間違ったか開拓団とは方向ちがいの大連の街中。森繁久弥も仕事の道中だったのかスタッフ数人と同行しました。今日中にどうしても目的地に到達できません。途中で『一緒に泊ろう。そして明日目的地へ』ということになったらしいのです。そしたら、そのお年寄りが、自分は百姓だからこの国の農家に泊めて頂きたいと申し出ました。さるべき人の紹介で、通訳を介してある農家でお願いしたそうです。そこの主人が快く承諾してくれて、その時、その老人が大地に手をついて頭を下げた。

『私の孫が、あなたの国で大変お世話になっております』

森繁久弥以下スタッフの方々が、思いもかけぬ成り行きに、あっけにとられたという話です。あまりの意外な姿にあっけにとられた。数ある思い出の

中で最も感動したこととして語られたそうです。（中略）

その反対の出来事も話されたそうです。旧満州で、日本人がずい分悪いことをした例。満員の汽車の中だったらしい。現地の人が座席に坐っているのを引きずり出して、自分がその座席についてたばこをふかしていた。同じ日本人として恥ずかしかった。腹がたった。国家権力をかさにきて我侭（わがまま）、気侭（きまま）をする。私もそれをきいて腹が立ちました。難しい理屈を言わず、実際にあったこと、見たことを話してこれからの日本人の生き方、在り方について考えさせられました。私は有難かったです。

何の理くつは知らなくても――あなたの国で私の孫が大変お世話になっております――この生き方は、相手もこちらも共に救われる。現地の人を引きずり出して、自分が座席についてたばこをふかす。これは自ら滅亡を辿（たど）る。

（中略）

私はテレビを見、聞きした中でこのことが一番心に残りました。」

ここに対称的な二人の日本人の話が出てきます。前の老人をA老人、後の日本人をB日本人としておきましょう。このような話を聞くと、誰しもB日本人を憎みます。自分はそのような日本人ではない。A老人こそ私だと思いたいわけです。けれども大石先生はこの書信の中で、次のように書いておられます。

「私は汽車の座席に坐っておる人を引きずりおろして、そこに坐った覚えはありません。むしろ座席を譲って他人を坐らせてあげる位の人間だと思いたい。人に語りたいです。人も憎む、私も憎むような、日本人として恥ずかしいと思わすような人間が実は自分なのです。

それを知らせて貰うと、実に広い世界が開けます。すべてが拝めるのです。座席を奪いとるような自己の姿の自覚の中から、人の前に手をついてお世話になりますという心が生まれるのです。」

このように大石先生は、B日本人こそ私だとおっしゃっています。それを知

らせてくださるのが念仏の救いだとおっしゃっています。

なかなかB日本人が私の本当の姿だというふうに受け止めることはできません。自分で自分の本当の姿を見ることは不可能だからです。B日本人こそ私だというのは、教えによって照らされた私の姿です。教えによって照らしていただかない限り、決してB日本人こそ私だと知ることはできません。そう思うことはできるかも知れません。けれども知らされたのと違って、自分でそう思っているだけなら、決して救われることはありません。卑屈になるだけです。

自分を照らすその具体的な教えこそは、大地に手をつかれたA老人のお姿、また畳に額をつけられた大石先生のお母さんのお姿です。つまり蓮如上人がおっしゃった「南無阿弥陀仏のすがた」です。そしてそのA老人の光、大石先生のお母さんの光は、実は現地の人を引きずりおろすB日本人こそ私だと知らせていただいた。その自覚の中から生まれてくる光だと大石先生はおっしゃいます。逆にB日本人を見て、私はあんな人間ではない。私はA老人のような人間だと思っている姿こそが、B日本人の姿に他なりません。

そのB日本人が私だと知らせていただく。B日本人を見て、私はそんな日本人ではないと思っている。そういう高上った者こそ私だと知らせていただく。それが稀有のことです。有難いことです。なぜなら自分からはとうてい知り得ないことを知らせていただいたからです。そう知らされてどうかしようというのではありません。そう知らされたことが最大のものを与えられているのです。大石先生は「それを知らせて貰うと、実に広い世界が開けます。すべてが拝めるのです」とおっしゃっています。

そういう自分に気付かせてくださるのが大地に手をつかれたA老人であり、また畳に額をつけられた大石先生のお母さんのお姿です。それはそのまま「南無阿弥陀仏のすがた」、南無阿弥陀仏の魂です。そのすがた、魂が、私の高上った姿を照らし出してくださいます。そこに救いがあります。

◇私が大石先生のお母さんのお姿を念じさせていただく時、様々の思いからふっと解放されるという経験を与えられたのは、そのような「南無阿弥陀仏のす

がた」に触れさせていただいたからだと思っています。

「いつもお世話になります。このご恩は死んでもよう返しません。こらえてください」と畳に額をつけられた。そのお姿を念じさせていただくだけで、もう何も言えなくなります。あれこれ言ったり思ったりしている私の高上がった「思い」の足場がなくなってしまいます。ただそのお姿を聞かせていただき、合掌させていただくのみです。

大石先生のご生涯の歩みも全く同じです。そのままが「南無阿弥陀仏のすがた」だといただかせてもらいます。

最後に、先月大石先生にお話しいただいたお彼岸のご法話の中から、心に残ったお言葉をいくつかご紹介させていただきます。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

◇仏法を道理で聞いても解決つきませんです。仏法は慈悲があるんです。宿業を知らせて救いたいという大きな世界があるんです。本当に宿業を知らせていただいたら、浄土に生まれるようになっているんです。ところが悲しいかな、我々は慈悲に気付かんで、苦しい方にばっかりとらわれて、解決のつかない道をあてどなくさ迷うていくんです。私もそうですよ。

◇業というのは「思い」でしょう。心配したりね、どうもならんことを、過去の重荷を負うたりして、心が疲れるんです。先を考えて心配になるんです。どうなろうかと・・・。心配しても来るのは来ますよ。何ぼ心配しても逃げるのは逃げていきますよ。

◇どんな目に遇うても、ちょっとしたことでもみんな業なんですよ。内のことを話しました。（中略）両親の業です。母ははっきりそれを言いました。私の業を持って生まれた子じゃけえ、私の業を知らせてくれとるんじゃと。手を合わせてナンマンダブツ。その時にね、業が消えるんです。以来何も言いません。

父は私が「宿業です」と言いましたら、「幼い時は親に責任があるが、四十にもなってから責任があるか」と言いました。しかし否定しても業はどうもなりませんよ。とうとうだんだんノイローゼ気味になって、肩を落としてね。妹の所に行ったら玄関の所に立っとった。「お兄ちゃん、あの気丈なお父ちゃんがしょんぼりしているんよ」と言いました。どうもできんですよ。それみな業ですよ。否定しても。

目先のことは見えますよ。無始よりこの方の業は見えませんよ。それを教えてくれるのが仏法です。

◇「それは私が苦労したようですが、気づかされてみると、仏様が私の中で、無始よりこのかたご苦労してくださっておられたのです」（『生まれてよかったですか』九八頁）これがわかるんです。母が孫のために苦労しても、孫に向かって反対に「お世話になりました。このご恩はようかえしません」と言うのは、弥陀の本願に気付かされた心じゃろうといただいています。その時はわかりませんでした。

皆さんどうぞね、如来を信じられたら、自分の苦労なんか苦労になりゃせん。阿弥陀さんがどんなに苦労されたか。これがわかってくるからね。私はそれでこうして生きているんです。続けてね・・・。もうそろそろへたばりそうなもんじゃが、へたばらん。

◇（藤解（とうげ）先生の寺で修道しておられた頃のこと）私は道徳、我（が）の世界ですから、善をせよ悪はするなという所に立っている。「素直（すなお）な」（藤解先生は大石先生のことを、素直な性格をしておると言われたそうです）というのは世間ではいいけど、一遍如来に照らされたら、素直ではない。我（が）が強いんですよ。「素直にせにゃあ嫌われるけえ」と、骨の髄（ずい）まで人間の心は我（が）があるんですよ。それを知らせてもらうんですよ。それを知らんかったらどうしても自分を立てますから。

「あんたが大事にしている我というのは、あんたを迷わすんぞ」

こう藤解先生は言われました。

南無阿弥陀仏

平成十五年十月十一日

宮岳文隆　拝

摂取山心光寺